
あなたと私の物語 2

ゆっきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたと私の物語 2

【Nコード】

N4658E

【作者名】

ゆっきー

【あらすじ】

江海が人魚の世界に戻ってきて七ヶ月。健吾への気持ち忘れられないまま過ごしていた江海に、シーナ女王から一週間だけ人間の世界に行くことが許された。ところが、迎えに来ると言った健吾には別の女の子が…。江海の物語、第二弾です！

忘れられない気持ち

人間の世界から帰ってきて七ヶ月が経とうとしている。この七ヶ月間、毎日が目まぐるしく変化して、色んな事が変わった。そして、私も変わった。

みんなから「女の子らしくなった」とか「恋してるの?」って言われるようになった。

そのとおり…のハズなんだけど…私の好きな人は人間。そう、人間の世界に行った時からずっと好きでいる。当然、叶うはずもない恋なんだよね。

私、江海。明るくて好奇心旺盛な女の子。人間にいた時は、山岡江海という名前だった。

私の片想いの相手、貝本健吾君。性格も良くて、優しくてサッカー好きの爽やか少年。人間の世界ではすごく人気があつてモテてたんだ。私、健吾君の家にお世話になってたんだけど、たたの居候人つて感じだった。それでも楽しかったよ。

「江海、ため息ついてどうしたの?」

友達のケイが私の顔をのぞきこむ。

「うっん、何でもないよお」

無理に作った笑顔をケイに向ける。

「もしかして、健吾ってコのこと考えてたでしょ?」

ケイってばスルドイ。私の考えてたこと、すぐわかるんだもん。

「私の予想、当たってた」

ニヤッと笑ってみせるケイ。

「うん…まあ…」

「もー、諦めなさいよ。どうせ、一生、会えないんだから…」
ケイが呆れ返りながら言う。

「そんな簡単に忘れられるわけじゃない。そりゃあ、このまま一生会えないけどさ…」

「じゃあ、なんで自分の気持ちを伝えなかったのよ？」

「伝えたというより学校で私の気持ちがバレちゃったから、健吾君は私の気持ち知ってるよ」

「で、どうなったのよ？」

「健吾君も私のこと好きみたいなんだ。私のこと、迎えに来るって言われた」

「そんなこと言われたら諦められるわけないけど、やっぱりフラれとけば良かったんじゃないの？」

何気なく言ったケイ。

確かに私もそう思う。フラれてとけば良かった。別れる前にちゃんと答えを聞いておけば良かったかな。

…後悔…。今から後悔しても遅いよね。ホントに遅い。

数日後、ため息ばかりの毎日が続いた。

時々、ケイが心配してくれる。

「ねえ、江海、いいこと教えてあげる」

岩の上で休憩中にケイが言ってきた。

「いいことって…？」

「それは、ね…」

意味ありげな表情を見ると、私の耳にそつと耳打ちした。

——え？ そんなものがあるの…？ そう思っちゃった。

「ホントにそんなのあるの？」

私の目は疑いの眼差しをしてる。

「私の話、信じてないでしょー?」

「だってー、そんな話、誰も信じないよ」

「あるの見たんだもん。江海、行ってみなよ」

ケイが催促する。

「う、うん…」

「ほら、早く!」

ケイが私の背中を押す。

「確認してくるから、ケイはここで待っててよ」

「OK!」

ケイはウインクをする。

私はシーナ女王の部屋へと向かった。今ならシーナ女王はいない。

「永久に人間になる本が、シーナ女王の部屋にある」

さつきケイがそう教えてくれたから、シーナ女王の部屋に来たんだけど…。

キョロキョロと部屋の中を見る。

うゝん…どこにあるんだろう? ケイの言っただこと、ホントかなあ…? でも、見たって言っただからあるんだよね。その本を読んで、ホントに永久に人間になれるのかな?

と、思ったその時、

「何をしているのですか?!」

シーナ女王が部屋に戻ってきた。

「何をしているの?!」

「いえ、別に…」

永久に人間なる本を探しに来た、なんて言えっこない。なんて言い訳しよう。

「部屋の家具の位置を変えようと思って、シーナ女王の部屋を見てて…それで…」

とっさに思い付いたウソを口にした。

「それは友達のケイに部屋を見せてもらえば済むことじゃない」
言い返されてしまった私は、何も言うことが出来ない。

うつ、そりゃあ、そうだけど…。

「ですよね。さよなら」

急いでシーナ女王の部屋を出た。

「どうだった？ 江海」

「探してたら途中でシーナ女王が来ちゃって…」

「ったく、トロいんだから…」

ケイが呆れた声を出す。

「ちゃんと次探しに行くもん」

こんなことでは諦めちゃいけない。まだ始まったばかりだもん。

私、自分の気持ちにピリオドなんて打てない。こんなことならちゃんと自分の気持ち伝えときゃ良かった。学校でバレたからって油断するんじゃないかった。別れる時にでも、自分の気持ちを伝えておくべきだったんだ。

会いたいよ、すぐ。七ヶ月間、何度も諦めようとした。忘れようとした。だけど、健吾君のこと諦められないし、忘れられない。七ヶ月間、一度も忘れたことなかった。そして、あの言葉も…。みんなと別れ際に私が健吾君に最後に向けた言葉。

…健吾君、今度、生まれ変わった時は、ちゃんと人間の女性として生まれてくるね。その時は好きになってね。それと、一緒になろうね…。

生まれ変わる日まで遠い。まだまだ先ってカンジだよ。

そして、もう一度、私はシーナ女王の部屋に向かうことにした。自分の気持ちと永久に人間の女性にしてもらえるかを伝えるに行くことにした。

グジグジしてもダメだもん。悩んでも仕方ないもん。ダメでもやるだけのことはやりたい。自分の気持ちにウソはつけない。今は頑張ることだけに集中したい――。

意外な答え

シーナ女王の部屋の前で立ち止まる私。心臓が高鳴る中、深呼吸をして、ドアを叩いた。

「はい」

中からシーナ女王が返事をする。

私は恐る恐る部屋に入る。

「江海、どうしたの？」

「えつと…実は…」

声が震えてる。

ちゃんとホントのと言えるかな？

「何？」

「あの…ケイから聞いたんですけど、シーナ女王が永久に人間になる本を持つてるって…」

「もしかして、人間になりたいの？」

「は、はい…」

「そうじゃないかと思った」

「えつ…？」

笑みを浮かべるシーナ女王。

「さっき部屋の家具の位置を変えるために来たって言ってたでしょ？　すぐに永久に人間になる本を探しに来たんじゃないかって思ったわ」

「……………」

バレてたんだ…。

「一週間くらいならいいわよ」

「ホントですか？！」

「ええ、ホントよ」

「ヤッター！」

思わず、私ってば大声を出してしまう。

「だけど、一つ条件があるの」

「条件…？」

条件ってなんだろう…？

「一週間後、人魚に戻る日、何があっても私のほうから消えるようになります」

「前とは違うんだ…」

「そうね」

前は自分から言わなきゃ消えることは出来なかった。だけど、今回は違うんだね。

「明日の午前十時に私の部屋に来ること。守ること」

厳しい表情をするシーナ女王。

「わかりました」

健吾君に会える。七ヶ月振りに会える。今、どうしてるんだろ？

元気にしてるかな？ 彼女、作ってるかな？

ふと、嫌な不安が頭によぎる。

や、ヤダ。私、こんなこと考えてる場合じゃないのに…。健吾君に彼女。絶対にそんなことない。ないもん！！

「良かったじゃない！」

早速、ケイに報告したんだ。ケイってば自分のことのように大喜びしてる。

「健吾君に会わなきゃ」

「頑張らなくちゃね」

「うん。私、後悔しないようにするよ」

「そうこなくちゃ！」

ガッツポーズをするケイ。

「ねえねえ、二人でどっか行こうか？」

「え？」

「だって、一週間も会えないんだよ？」

「OK！」

私、誰かのために必死になること初めてだと思う。人を好きになって必死になることは初めて。好きな人のそばにいたい気持ち。愛しく思う気持ち。ライバルがいて好きでいる気持ち。わかった気がするよ。

私、この七ヶ月間、健吾君のことで色々悩んだ。「健吾君のこと好きでいるのはやめよう」って、何度も思った。やっぱり好きでいて良かったと思ってるよ。

翌日の午前十時にシーナ女王の部屋に来た私。シーナ女王の注意を少し受けた。

「いいわね？ 江海」

「はい」

「じゃあ、目をつぶって…」

私は静かに目を閉じた。

一週間、人魚の世界なんだ。二度目の人魚の世界。前よりもすごく短い。それでもいいの。健吾君に自分の気持ちを伝えるのには十分な期間。失恋しても悔いは残らない。絶対に…。

私、自分の気持ちにピリオドを打たなきゃいけない。もしかしたら、今回で人間の世界に行くのは最後かもしれないから。だから、後悔だけはしたくない。

それから、何分くらい経ったんだろう。私、やっと立ち上がったの。

あの日、健吾君と出会った浜辺にいた私。
なんだか、懐かしいね。何も変わってない。そういえば、健吾君の家、すぐにあったよね。とりあえず、健吾君の家に行ってみなくちゃ。

自分の記憶を辿って、健吾君の家に向かって歩いていく。

ドキドキするなあ。久しぶりだもんな。健吾君、どう思っかな？

ビックリするかな？ 早く健吾君に会いたいよ。

自分の歩き方がスキップに変わっていく。

サッカー頑張ってるかな？ その前に足はどうなったんだろ？ 健

吾君、骨折してたんだよね。だから、大丈夫かな？ 気になっちゃうな。

あつ、健吾君の家あった！！

うわあ…。私、ホントに健吾君の家に来たんだね。

私は健吾君の家の玄関の前で立って感動していた。
と、その時だった。家から誰かが出てきた。

「水野、気を付けろよ」

男性が相手を気にかける。

あの声は健吾君の声だ。すぐにわかったよ。

「うん、わかった。ありがとうね」

相手の女の子の声。

ズキンと胸が痛む。

渚でも夏子でも田崎さんでもない、私の知らない女の子。そして、
健吾君とその女の子が私に気が付いた。

「え、江海ちゃん？！」

ビックリした健吾君の声。

ちよっとバツが悪そうな表情をしてる健吾君。

一緒に女の子が不安そうな表情で、健吾君の服の袖を引っ張る。

「健吾君、この女の子誰？」

「う、うん…ちよっと知り合いの女の子」

「へえ…そうなんだ」

ホッとした声を出す。

このコ…健吾君のこと…好きなんだ…。

表情と声でわかった。

そして、私は走って来た道に戻った。

「江海ちゃん!!」健吾君の声が響く。

あのコ、私より可愛かった。健吾君と似合ってた。きっと、健吾君、あのコのこと好きだと思う。例え、今は両思いじゃなくても、二人は仲がいいんだ。健吾君は私のことなんか忘れたんだね。

久しぶりに会った健吾君。嬉しかった。だけど、久しぶりに会った健吾君はほんの少し変わってた。あのコに対する話し方と私に対する話し方。服装や髪型…なんか変わってた…。

これはあのコのためなのかな？ いつか二人のお付き合いがスタートするのかな？

私はあの浜辺に戻ってきて、階段に座り、一人で泣いてたんだ――
。

江海、臆病だね。自分の気持ち伝えるって決めたのに…。それなのに、走って浜辺まで戻ってきて、ダメじゃない。この気持ちにピリオドを打って決めたんでしょ？ 早く健吾君の元へ戻らなきゃ。

ドキドキ…ドキドキ…。

私の鼓動が早く健吾君の元へ戻れて催促してる。自分でも早く戻らなきゃって思ってる。でも、この顔じゃ戻れないよ。

明日になれば、私の気持ちにも落ち着きが戻る。明日には健吾君に自分の気持ちを伝えるに行く。それまでは泣かない。失恋したら今みたいにかくさん泣くと思う。

私、頑張るよ。

追いかけてきた大切な人

それから、一時間が経って、お昼前になった。私はまだ健吾君の元へ戻る気になれず海にいた。

どうしよう…。このままじゃダメなのにな。もう健吾君の家には迷惑かけられない。今日は野宿するしかないよね。

と、途方に暮れていた時、

「江海ちゃん！」

背後から聞き覚えのある声に呼ばれた。

あ、健吾君だ！

健吾君は息を切らせて、私の横に座った。

「ずっと探したよ」

「え…？」

「もしかしたら、ここかもって思ってたさ」

「私を探してくれてたんだ…」

「久しぶりだな」

「そだね」

「人魚から人間になれたのか？」

「うん。一週間だけね」

「短いんだな」

「まあね」

「オレ、まだ江海ちゃんのこと好きだからな」

「ホントに…？」

私ってば疑いの目で健吾君に聞いちゃう。

ホントは疑ったらダメなのに…。ホントは嬉しいはずなのに…。

「うん、マジだよ」

「ありがとう。ねえ、あのコ誰なの？」

聞きたくはなかったけど気になって聞いてしまった。

「アイツ？ アイツは同じクラスの水野ってヤツだよ」

「同じクラス…？」

思わず、首をかしげてしまう。

前に人間の世界にいた時に、同じクラスにいたかな？

「クラス替えがあつたんだよ。ほら、もう三年だからさ」

「ああ…そっか、それで…」

私は納得しながらうなづく。

「今年、受験生だからな。オレ、まだ就職するつもりないんだ。今のところ、大学進学予定だ」

健吾君は真剣な表情で語ってくれる。

ふーん…大学つてどこに進学予定なんだ…。

「あ、ゴメン。話それてしまったな」

慌てて謝る健吾君。

「ううん、いいの。あのコと付き合ってるの？」

「バカ。江海ちゃんのこと好きなのに、なんで水野と付き合いわなきゃいけないんだよ？」

そう言うのと、健吾君は笑ってくれた。

「そうだよな」

「先に言つとくけど、実は今日、水野に告白されたんだ」

——え？ 告白？

私は自分の耳を疑った。

「断ったよ。好きな人いるって…」

私の不安な気持ちを察したのか、ちゃんと言ってくれた。

「断ってくれたんだね」

安心したようなホッとした声を出してしまう私。

「そっいえば、江海ちゃんて行くところねーだろ？」

「うん、まあ…」

「オレんち来いよ！」

「でも…」

「いいんだって。江海ちゃんがいてくれたほうが家が明るくなるからさ」

「健吾君…」

「行こうぜ！」

健吾君は立ち上がって歩き出す。

私も急いで立ち上がって健吾君の横に歩く。

「渚と夏子は元気にしてる？」

「元気にしてるぜ。江海ちゃんが人魚に戻ってからしばらくの間は落ち込んでたけど、今はそんなことねーよ」

「…なら良かった」

少し安心したな。

「明日、日曜だし会えよ。オレから連絡つけてやるから…」

「いいの？」

「全然いいよ」

「じゃあ、会っ！」

渚と夏子に会える。なんか、それだけで元気になれちゃう。

「江海ちゃん、元気だったー?!」

ママが大きくて元気な声で、私に抱きつきながら聞いてきた。

「すごく元気だよっ!!」

「江海お姉ちゃん、久しぶりだねー」

奈美ちゃんも嬉しそうにしている。

「奈美ちゃん、元気だった？」

「うん！ 元気、元気！」

「早く中入って」

ママが早口で言って、私を家の中に入れる。

「部屋はこの前の部屋でいい？」

「この前の部屋？」

「うん。江海ちゃんが出て行ってからあのままにしてるのよ」

「え？」

あのままってことは…まさか…健吾君の隣の部屋ってこと?!」もう少ししたら夕食の時間だから、部屋でゆっくりしておいてよ」

そう言うと、ママはキッチンへと行ってしまった。

大好きな健吾君。渚と夏子はいいい友達。永久に人間なんてなれっこないけど、私はこれでいい。これでいいんだ。健吾君の彼女になれなくていいって言えばウソになっちゃうけど、健吾君のそばにいたら、それでいい。

翌日の午後、健吾君の家に渚と夏子が遊びに来たの。

「江海、元気だった？」

夏子が嬉しそうな声で聞いてきた。

「うんうん、元気よ」

「元気そうだね。どうやって人間になったの？」

渚は不思議そうに聞いた。

「シーナ女王に頼んだの」

「シーナ女王って…？」

「人魚の世界の一番エライ人なんだ」

「へえ…」

「でも、来週には戻っちゃうけどね」

「今回は短いよね。前は長かったけどね」

「確かに」

渚と夏子が口を尖らせながら言った。

「私がここにいていいんじゃない？」

「まあね」

なんだか、昔の友達に会ったみたい。ずっとずっと、みんなの近くにいたい。このままずっと人間の世界にいてもいいかなって思ってしまうよ。

「江海、なんか前と変わった」

渚は私の顔を見ながら言った。

「そう？」

「うん。前より可愛くなった。健吾のせいかな？」

渚は意味ありげに笑いながら言う。

そんな渚にドキリとしてしまう。

「まさかぁ…。そんなこと…」

「人魚の世界でも健吾のこと想ってたんでしょ？ 今の江海見てると、そう思えちゃう」

「そうよね。江海は健吾一筋、だよね」

夏子も私の顔を見つめながら言った。

「江海が人魚だなんて今でも信じられない。でも、江海と出会えて良かったなって思ってるよ」

渚は微笑みながら言った。

「私もよ。江海と友達で良かった」

「二人共、ありがとう。嬉しいこと言ってくれて…」

二人の言葉に涙が出そうになった。

私だって人間の世界に来て、みんなに出会わなければ、人魚のという狭い世界にいたままだった。私、ホントに幸せ者だよね。

私のライバル

渚と夏子が帰って、私は健吾君の部屋の前でウロウロと行ったり来たりしてる。健吾君の部屋の中に入りたいような入りたくないような…。でも、迷ってたらダメだよ、江海。早くしなきゃ。

と、思ってたらガチャツとドアが開いた。

「あ、江海ちゃん。どうしたんだよ？」

部屋の前に立ってた私に健吾君が声をかける。

「う、うん…」

私が頼りなく返事した時、ヒョッコリと昨日、健吾君の家に遊びに来てた水野さんが顔を出した。

「江海…さん…？」

私に声をかける。

「は、はい…」

「私、水野沙絵。よろしくね」

ニコツと私に笑顔を向ける。

「山岡江海。よ、よろしく…」

私の声、震えてる。

「江海ちゃん、中に入れよ」

「うん…」

やっとの思いで返事した私。

健吾君の部屋に入ったんだけど、二人は仲良く話してる。

この二人を見てると辛いな。健吾君の優しい声。七ヶ月前は私に向けた声だった。だけど、今は違う。水野さんに向けてる。

七ヶ月という時間は私にとってすごく長かった。七ヶ月間、健吾君も同じ気持ちでいてくれている。そう思ってた。だけど、今、健吾君の心の中には水野さんという女性が入り込む隙間が出来たんだね。こうやって私が悩んでることなんて二人にとって関係ないことなん

だよ。健吾君の中には私じゃなくて…水野さんなんだね…。

昨日、私のことまだ好きだって言ってくれた時、嬉しくて涙が出てきそうだった。もしかしたら、告白すれば成功するかもしれない。そう思った。でも、そんなけとなかったんだね。私の勇気はムダになっただね。このままだと失恋しちゃう。人魚の私を相手してても仕方ない。今になって気付いたこの気持ち。淋しいよね。

そう思うと、胸が激しく痛んで不意に泣きたくなる。

健吾君のバカ…。私がいるんだよ？ 少しは気を使ってよ。私が人間の世界にいられるのは、あと五日なんだよ？ 私、もつともつと健吾君の側にいたいのに…。健吾君が他の女の子の子といると不安になるよ。切なくなるよ。

私にとっては特別な一週間で、やっと健吾君や渚や夏子に再会出来たチャンスで、自分の勇気を振り絞って、健吾君に気持ちをぶつけようと思っただのに…。

私は何がなんだかわからなくなってうつむいてしまう。

「江海ちゃん、どうした？」

私の様子がおかしいことに気付いた健吾君。

「……」

黙ったままの私。

「江海さん…？」

水野さんも心配そうにしてる。

「……」

「オイ、どうしたんだよ？」

「江海さん…」

「…健吾君の…バカ…」

「え…？」

「健吾君なんて、大ッキライ!!!」

自分でもビックリするくらいの声で叫んだ。

そして、私は立ち上がって、健吾君の部屋を出ていった。

「江海ちゃん!!!」

健吾君が呼ぶ声を無視して、自分の部屋に戻って、ベッドに倒れ込んで泣いた。

涙が次から次へとポロポロ頬に伝う。

聞きたくない。あの二人の笑い声なんて。見たくない。あの二人の笑い顔なんて。あの二人と一緒にいるのは辛い。私にとって辛いよ……。

どうして？ どうしてなの？ なんで、私は人魚なの？ 叶うはずのない恋をしてるの？ もうわからなくなってきた。健吾君は私が他の男の子と一緒にいてもいい。そう思ってるの？

私ってば、自分の思い通りにならないからってあの二人に八つ当たりしてる。水野さんに嫉妬してるだけ。健吾君と一緒にいられるだけでも良かった。それなのに、八つ当たりしてる。私って最低だ。

健吾君と一緒にいられるだけでもいいじゃない。明日、水野さんに会おう。会って、「私、健吾君のこと諦める」って言おう。私は永久に人魚になんてなれないんだから……。だから、ちゃんと水野さんに会って言わなくちゃ。今、告白しても失恋するだけ。健吾君と水野さん、とても似合ってる。そう思う私がいた。

それから二時間、私はウトウトし始めてたその時、私の部屋のドアのノック音が聞こえた。私は顔を上げて、ほんの少し腫れた目をドアに向けた。

「江海ちゃん」

健吾君が優しく声をかけてきてくれる。

「健吾君……」

「大丈夫？」

「うん…」

「気のない返事をする私がいるベットまで健吾君は来てくれる。気のない返事なんかしてたら、大丈夫なわけないって言ってるようなもんだよね。」

「さつきはごめんな」

「……？」

「水野と二人で話してたから、江海ちゃんやキモチ妬いただろ？」

「うん、まあ…」

「私は改めて健吾君の部屋で大きな声を出したことが恥ずかしくなってきた。」

「さつきの江海ちゃん言葉、結構傷付いたな」

「ご、ごめん…」

「謝らなくてもいいんだって。オレも悪かったんだし…」

「え…？」

「オレだって同じことされたらヤキモチ妬いてた。江海ちゃんのと好きなのに、何やってんだろっ、って思ったよ」

「すまなそうな健吾君の表情。」

「私のハートにズキンと突き刺さる。」

「うっん、いいの。私、気にしてないから…」

「無理に笑顔を作る私。」

「ホントは気にしてるんだろ？」

「あ、え…？」

「顔でわかるよ。江海ちゃんて思ってることすぐ顔に出るからな」

「アハハハ…」

「笑ってごまかす私に対して、健吾君はいつもと変わらぬ笑顔をする。」

「健吾君のこと、諦められなくて当然だね。健吾君の笑顔は優しいもん。笑顔が好き。健吾君のこと、見つめる度に気付く。ずっと側にいたいんだ。ずっと隣にいたいんだ。早く言葉に出さないとウソに」

なりそう、言葉にしくちや不安になる。当たり前だけどそう思う。

「江海ちゃん、明日、水野が会いたいんだって」

「明日…?」

「うん。駅前のファーストフード店があつただろ? そこで四時半に会おうってことになってるんだ。いいよな?」

「うん」

急な展開だよ。健吾君のこと諦めるって言うチャンスだ。でも、水野さんから会いたいってなんだろう? 何か用かな? 用があるから会いたいって言うてるんだけど…。

健吾君の口から水野さんの名前が出るのは、ちょっと辛いけど、同じクラスメート、同級生だから仕方ないよね。

江海、水野さんという恋のライバルには負けてはダメだよ。例えば、諦めることになっても…。二分の一の確率。私のカードと水野さんのカード、どちらを引くかは健吾君次第。出来れば、私のカードを引いて欲しいっていう気持ち強い。だけど、明日は水野さんに言うよ。

「私、健吾君を諦める」って…。自分の気持ちを伝えに人間の世界に来たけど、私が健吾君のことを好きなように水野さんも健吾君が好きなんだもん。もう健吾君のことで悩むことはしたくない。だから、ちゃんと水野さんに言おう――。

諦めるよ…

翌日、駅前のファーストフード店で私と水野さんともう一人田崎さんと三人、向かい通しに座って長い沈黙が続いた。

「江海さん、健吾君のことどう思ってるの？」

水野さんが聞いてきた。

「えっと…あの…健吾君のこと…好きです」

私は小さな声で答えた。

「私も健吾君のこと好きなの」

予想してた水野さんの答え。

「健吾君、江海さんのこと好きみたいだけど、私は絶対に負けない」
きっぱり言い切る水野さん。

その迫力に負けてしまう。

誰にも負けたくない気持ち、なんだかわかる気がする。

「一度、フラれてるけど健吾君を振り向かせてみせるから…」

「……」

「江海さん、人魚なんでしょ？」

「なんで…知ってるの？」

「田崎さんから聞いたわ」

「……」

「なんで人間の世界にいるの？ 人魚が人間になれるわけがないのに、
なんでなのよ？」

水野さんの口振りから怒りがみえる。

「そ、それは…」

どうしよう…なんでって聞かれても…。

私の頭の中、パニックになってる。

「どうせ、健吾君に会いに来たんでしょ？」

水野さんの言葉に私の胸が高鳴る。

「どうなの？」

「…そのとおりだよ」

「へえ…」

水野さんは私を見下したようにうなずいた。

私と健吾君が一緒になれるわけない。そう思ったに違いない。私、それだけは確信した。私だってそう思う。だけど、一緒になれなくてもいいもん。ただ健吾君の側にいたいだけだもん。

「人魚の江海さんのどこがいいんだろ？」

「そ、そんな…」

ヒドイ…。そんなこと言うなんて…。

「健吾君のこと悪いように言わないで！！ 水野さんが思ってる程、悪い人じゃないもん！！」

「そんなこと私だってわかってるわよ。だから、好きになったんじゃない」

「だけど、そんなふうに言わないで」

「悪く言ったつもりじゃないけど…？」

「……」

何も言い返せないでいる私。

余裕の笑みを浮かべる水野さん。

「私だって健吾君に好きになってもらいたいんだから…」

水野さんは急に悲しげな表情で言った。

「健吾君、言ってた。“江海ちゃんのこと、一日も忘れたことないんだ”って言ってた」

「健吾君が…？」

「それ聞いた時、江海さんに負けるなっと思ってた」

「大丈夫よ。きつときつと健吾君、水野さんのこと好きになっくれるよ！」

「え…？」

「だって、私なんかというよりも水野さんと一緒になったほうがいいもん！」

「江海さん…」

「私、健吾君のこと諦める」

「山岡さんいいの？」

今まで話を聞いていた田崎さんが、目を丸くしている。

「うん、いいの。私は人魚だし一時的に人間になっただけだもん。二度と…永久に…永遠に…人間になれっこないもん…」

そう言いながら、私の目からは涙がいつぱい溢れてきて、目の前がボンヤリとなっていく。

「…だから…健吾君と一緒になってくれたほうがいいもん…」

「山岡さん…」

田崎さんは言葉をかけられずに私を見てるだけ。

なんで私が人間じゃないんだろう？ そうすれば、諦めるとかそういう話はなかったのに…。健吾君にもちゃんと話さなきゃ。「水野さんと一緒になっ」って。

私は二人の恋のキューピット役。それしかねないの。二人が主人公なんだから…。

そうやって、一つ一つを思い知らされる度に、辛くなる。悲しくなる。だけど、そのほうがいい。きっと健吾君のこと諦められると思うから…。

昨日、健吾君の部屋で私と健吾君と水野さんと三人でいた時、私の知らない健吾君を見たような気がして、どうしたらいいのかわからなくなってた。見るのが辛くなってた。田崎さんの時と同じ。二度と同じことを繰り返したくない。そう思って、二度目の人間の世界に来たのに…。

家に帰ってから、正直に水野さんのことを健吾君に話したの。

「マジ？ いいのかよ？」

ビックリしてる健吾君。

「いいのよ。私、今回で人間になるの、最後かもしれないから……」

「オレが水野と一緒になっついていいのか？」

「いいよ。私が人魚の世界に戻ったら、私のこと忘れてよ、ねっ？」

私はゆつくりと言葉を選びながら健吾君に言った。

「忘れられるわけねーだろ。オレは水野と付き合う気ねーし、江海ちゃんが人間にずっとなれなくても、オレは江海ちゃんのが好きだから……」

「そう言ってくれて嬉しい」

泣きそうになりながら言ってしまう。

私よりも水野さんのほうがいいと思うけど、やっぱり私一筋なんだね。嬉しいな。

「ホントに私のこと忘れていいんだよ？」

「忘れること出来ねーよ」

「うん……」

無理しなくてもいいのに……。健吾君も辛いんだよね。そりゃあ、そうだよ。もしかしたら、ううん、これから先、一生私と会えないかもしれないんだもん。健吾君の気持ちわかる。すぐわかる。はあ……。

あ、えっ?! 今のため息、私じゃなくて健吾君のため息。どうしたんだろう？ 気になっちゃうよ。

「健吾君……？」

気になって健吾君の顔をのぞきこむ。

「ん？」

「ため息なんかついてどうしたの？」

「一日疲れたなっと思ってさ」

なんとなく元気がない健吾君。きつと七ヶ月前、私が人間の世界に来た時から色んなことがあって大変なんだよね。それだけはわかる。私、自分の気持ちと健吾君の気持ち、両方を大切にするよ。絶対に

⋮
○

永遠にサヨナラ

それから四日後、健吾君や渚、夏子と永遠にサヨナラする日がやって来た。

もう、永遠に会えないんだ。あれから私、自分の気持ち伝えてない。何度も自分の気持ち伝えようとした。だけど、伝えられなかった。

人魚に戻る日、私は一人で部屋の窓の外を眺めていた。

この七ヶ月間、健吾君はいい夢見させてくれたね。楽しいことや嬉しいことは勿論、嫌なことや辛いことも色んな思いをしたけど、私にとつていい思い出だよ。この貴重な気持ち、絶対にどこに行っても忘れない。

健吾君の笑顔、健吾君のサッカーしてる姿。何もかもが眩しくて、目を瞑ってしまいうくらい輝いてた。でも、もう二度と見ることも会うこともないんだよね。そして、一緒になることも――。

健吾君と初めて出逢った海。永遠の場所。きつとあの海だけは私の中から消えない。

初めて人間の世界に来た時は、不安でどうしようもなくて仕方なかった。だけど、健吾君や渚や夏子、色んな人がいたから三ヶ月間、頑張れた。そして、今回も…。

青空の遥か向こう。失くした何かが見える。大きな大きな何か。人間が失くしてきた、忘れてきた何か。それは多分、きつと愛とか勇氣だと思う。その何かは人魚にもあると思う。

「今日でサヨナラする日だな」

健吾君が悲しくて、少し辛そうな表情で言った。

「うん、そだね」

私はコクリとうなずく。

「江海ちゃんと一生会えないんだと思うと、オレ辛いよ」

「私も辛いよ」

「だけど、オレ頑張るな。江海ちゃんのこと、当分忘れられないと思うけど…。江海ちゃんも人魚の世界で頑張れよ」

「うん」

と、その時、

「江海ちゃん！ 渚ちゃんと夏子ちゃんが来てくれたよ！」

ママが息を切らせてくる。

「ママ…」

「江海、健吾に聞いたから来たんだ」

「渚…夏子…」

ジワッ。

私の瞳から涙が溢れてくる。

「江海と別れるの、これで二回目だね」

「そうだね。二人共、元気だね」

私はわざと明るい声を出す。

でも…ダメなの…。

涙がもつともつと溢れる。

「江海、何泣いてんのよ」

「だって…」

言葉につまってしまふ。

「ホントに元気だな」

そう言った健吾君の瞳からも涙が光るのが見えた。

そして、私は健吾君に抱きすくめられた。

「もう二度と会えないけど、オレのこと忘れんなよ！」

「絶対に忘れない。私のことも忘れないでよ」

「オウ！ 大丈夫！」

「ホントにホントだよ」

「わかってるって」

「パアアア…」

光が差し込んだ。

これで最後になるんだ。みんなと会えなくなるんだ。

そう思うと、私の瞳に涙が余計に溢れる。

「みんな、元気で…」

そう言うのと、私は目を閉じて消えた。

健吾君と一緒に過ごせた日々。幸せだった。健吾君が私を呼ぶ時のニュアンス。切なくて甘い声。私にとって最高に幸せだった。夢を見てる気分だった。ホントに嬉しかった。

一度目の別れは、何も怖くなかった。だけど、二回目の別れは、みんなに会えないのがとても辛い。永遠にサヨナラしたんだもん。これで私の恋も終わる。バイバイ…私の初恋。バイバイ…健吾君。バイバイ…渚、夏子、田崎さん、水野さん。バイバイ…人間の姿だった私。ホントに…バイバイ…。

「江海、どうだった？」

ケイが笑顔で聞きながら寄ってくる。

「健吾君に私の気持ち伝えなかったの」

「えーっ、なんでー？ どうしてー？」

予想してたケイのセリフ。

「健吾君のこと好きだってコが現れたから諦めたの」

「なんで？」

「だってもう永遠に健吾君に会えないんだもん。告白してOKの返

事もらっても付き合えないもん」

「そうだけど…ちゃんと自分の気持ち伝えたほうが良かったんじゃないの？」

「うん…」

これで…これで…いいの。もうふっきれたから…。私がいなくなれば、健吾君は水野さんと付き合うことになる。

江海、これで良かったんだよね。私の想いは無駄にならなかった。そう解釈していいよね。

「ケイ、行こっ！」

「そだね。グチグチ言っても仕方ない。じゃっ、行こうか」と、私とケイが行きかけようとした時、

「江海！」

振り向くとシーナ女王がいた。

「あ、シーナ女王」

「どうしたんですか？」

私が質問すると、シーナ女王は驚くことを告げた。

「江海、あなたを永遠に人間にします」

——え？ 今なんて言った…？ 確か、永遠に人間にするって…聞こえたけど…。

「人間にするってホントですか…？」

「ええ、ホントよ」

「ヤッタね！ 江海」

「うん！！」

健吾君とずっと会える。ホントにずっと会えるんだ。

そう思ったら涙が溢れてくる。

「なんで泣くのよ？」

「だって…嬉しいんだもん」

健吾君のことで色々悩んだ日。なんだか今となってはいい思い出。私が入で生まれてきたけと自体、憎んだこともあった。だけど、そんなことなかったんだね。入魚だから出来ることもあるんだね。

今、気付いたよ。

「江海、私とケイには会えないけど、人間の世界で頑張るのよ」

「はい、わかりました」

しっかりと返事する。

この世界と別れるのは三度目。三ヶ月間、人間になった時。一週間、人間になった時。そして、三度目はこの世界には戻って来ない。次からは人魚の住人ではない。人間の世界の住人になるの。

「江海、しなくちゃいけないことがあるの」

「しなくちゃいけないこと…？」

「それはね、人魚の世界の人間を忘れなくちゃいけないの」

「そんな…」

「いいわね？」

「…はい」

不安でいっぱい私。

「大丈夫よ、江海」

「うん…。よしっ！ 頑張る！」

私は不安になりながらも強く決意する。

「じゃあ、いいわね？ あの海にみんなが出迎えてくれるわ。目を
つぶって…」

「はい」

私は静かに目をつぶった。

三度目の人間の世界。それは永遠に人間になるために行くの。シー
ナ女王やケイには会えないけど、私は大丈夫。頑張るから。一人じ
やない。みんながいる。

「江海ちゃん」

優しく包み込むような声の健吾君。いつもの笑顔でいる。渚も夏子
も田崎さんも水野さんもいる。

「オレンち、来るだろ？」

「うん、もちろん」

「山岡さん、これから仲良くしよう」

田崎さん、なんだか違う表情。変わったよね。

「江海、今度、一緒に出掛けようよ」

「カラオケに遊園地にコンサートに……」

「オツケー——！」

ガッツポーズを作る私。

「江海さん、やっぱり私のほうが健吾君のこと諦めるよ。どう頑張ったって人の気持ちを動かせることは出来ないってわかったから……」

「いいの……？」

「いいの、いいの。気にしてないから、ねっ？」

「水野さん、ありがとう」

こんなやりとりをしていると、人間なんだと実感する。

私、これで人間なんだね。初めて人間の世界に來た時みたい。健吾君と出逢った時のことが蘇ってくる。あの日、ここから健吾君が家まで運んでくれたんだよね。初めて出来た友達も渚と夏子だった。

恋のライバルは田崎さんだった。二度目は水野さんだった。今までのが私の脳裏に浮かんでくる思い出。

これからはここでの新しい生活が始まるうとしてる。頑張らなきゃ。強くなきゃ。大丈夫。私は頑張ってみせるから——。

幸せの歌

私が人間の世界に来てから、七年が経とうとしてる。私達は二十五歳になった。

私と健吾君、小さな教会で結婚式をあげたの。

パパとママと奈美ちゃんはビックリしてたけど、きちんと説得したら、ちゃんとわかってくれたら承諾してくれたんだ。

結婚のことをパパ達に言う時、すごく緊張したけど、

「二人で決めたんだからそんなに緊張することはない」

そう健吾君が言ってくれた。その言葉が私にとって何より心強い言葉だった。

「江海、おめでとう！」

渚と夏子が祝ってくれる。

「ありがとう。次はどっちが結婚するんだろうね？」

「うーん…私は当分結婚はないだろうから、渚なんじゃないの？」

「何言ってるのよ？ 夏子が先じゃない？」

「そんなことはないって」

二人のやりとりを微笑みながら見てしまう私。

そして、田崎さんと水野さんも来てくれた。二人共、おめでとうって祝福してくれたんだ。

「二人共、結婚したんだ」

水野さんは悲しそうに言っただけど、すぐに笑顔になった。

「山岡さん、幸せになってね。健吾、ちゃんと山岡さんを幸せにしないとダメよ」って、田崎さんはイタズラな笑顔で言ってくれた。

きっと田崎さんと水野さんには辛い想いをたくさんしたんだ。健吾君を巡って私とライバルになった。私もわかる。辛くて悲しい想い。

人を好きになるのは難しい。人に好きになってもらうのは難しい。私、実感した。

一週間だけ人間の世界に来た時、もう二度と健吾君と会うことはない。そう思っていたあの頃。あの時、シーナ女王が永遠に人間にしてくれなかったら、今の私はいなかった。きっと人魚のまま。健吾君と一生会えないままだったと思う。

私と健吾君、これから色んなストーリーがあると思う。健吾君を想って切ない涙を流さなくてもいい。切ない想いをしなくてもいい。一緒にそばにいられる。時には泣いたり笑ったり、苦しいハードルを越えなきゃいけない日もある。そして、これから辛いことがある日もある。

祝福しているウェディング・ベル。大きく甘い音に聞こえる。みんなの笑顔が輝いて見える。私、健吾君がいるから辛くない。健吾君とだったらこれからの人生頑張れるよ。きっと健吾君も同じ気持ちでいてくれる。そう思っちゃっていいよね。

「健吾君、嬉しいね」

「うん。これから頑張ろうな」

「そうだね」

「辛いこともあるだろうけど、江海ちゃんとなら乗り越えられるよ」
「私もよ」

二人、見つめあって笑いあった。

「江海ちゃん、ウェディングドレス似合ってるよ」

「ありがとう、健吾君」

「二人、力合わせていこうな」

「うんっ！」

私の声が空高く響いた。

教会の中でみんなが幸せにかかるために歌を歌ってくれている。私達

のために、未来の子供のために歌ってくれているんだ。

その歌に私はついに涙を流してしまった。

もう泣かない。涙は流さない。そう思ってた。七年前にはたくさん涙を流した。もう泣かないって決めてたのに、それなのに涙を流してる。

「大丈夫か？」

健吾君がそつと耳打ちする。

「大丈夫よ」

私は涙をふきながら返事する。

大丈夫だよ。私ってばもう笑顔しちゃってるよ。

シーナ女王、ケイ、今、何していますか？ 今日、私は健吾君と結婚しました。人魚でいた時よりも、ケイといた時よりも、ずっとずっと幸せになるね。何があっても健吾君と力を合わせて頑張っていくね。だから、海の底から見守っていてね。健吾君と出逢った海で見守っていてね。もし、辛くなったら二人のことを思い出すよ。

今日は私達にとって最高の日。今日からとおきのラブストーリーが始まる。ねえ、健吾君、ホントに頑張ろうね。みんなが見守ってくれてるから…。見守る中、ラブストーリーが始まって永遠に終わらない。

——絶対に何があっても…。

幸せの歌（後書き）

「あなたと私の物語2」は、「あなたと私の物語」の続編で書いてみました。どうでしたか？ この物語はこれで終わりだけど、次回作も読んでくれたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4658e/>

あなたと私の物語 2

2010年10月20日19時03分発行